

〈新年恒例〉 当たると大評判! 「2015年傾斜宮占い」 中津川りえ

婦人公論

Fujinkoron <http://www.fujinkoron.jp/>

№1417 570yen 2015

1/22

〈本誌独占〉父娘の秘蔵写真
直筆手紙初公開!
長女が語る
「やじきたかじん」
父との大切な思い出を、
捏造ストーリーで壊さないで

〈特集〉新年から始めよう!
幸運を
引き寄せ
る
生き方

渡辺和子
「置かれた場所で
咲きなさい」著者の至言

「私の『元氣スイッチ』とは」
綾小路きみまろ、
鈴木砂羽、谷川俊太郎、
新垣隆、日本エレクトル連合、
よしもとばななほか

坂東玉三郎
今の歌舞伎は
「人」を愛せず、金がす

「愛」を愛されることの習慣
「なまじりな人」の考え方
なまじり文字で迷いを払う
持ちモノ風水で今すぐ開運

〈特別インタビュー〉前編
瀬戸内叔聴
波瀾の人生に迫る

高倉健さん
「不用の美学」
加藤登紀子

〈新連載エッセイ〉
川上未映子
「一期」まつり!

表紙・坂東玉三郎

文◎山田清機 写真◎熊谷聖司

村松静子

開業ナースは心を聴く

看護師は、

医師の「靴持ち」ではない

最初に、私の家族のことを書かせていただきました。

83歳になる私の父は2012年10月初めに蜂窩織炎ほうかしかんえんの疑いで緊急入院し、抗生剤の点滴を連続して受けながら、検査につぐ検査の日々を送っていた。しかし、担当医からの検査結果の説明を聞くことはほとんどできず、看護師に尋ねてみても、「ドクターは忙しいので」という木で鼻をくくったような返事があるばかりだった。

「おい、俺は今どうなってるんだ」

長引く入院生活ですっかり筋肉が落ちてしまった脛すねをさらしながら、父が苛立たしげにこうつぶやいたのが11月の末。父のストレスがピークに達していたとき、突如家族に呼び出しがかかった。

「うちではこれ以上診られないので、転院してください。少し認知症も出ているのでいったん家に帰ってのんびりして、年明けにでも新しい病院に移ってはどうでしょうか」

担当医は蜂窩織炎ではなく悪性リンパ腫の疑いが強いこと、この病院では血液がんの治療はできないことを、なんの打ち合わせもなく、患者本人を前にさらりと saying のけた。

青天の霹靂へきれきとはまさにこのことを言うのだろう。今までの治療はいつたいなんだったのか、疑問と怒りがこみ上げてきたが、「お医者様は絶対」という意識の両親を前に言い返すことができたのは、「父は認知症ではない」という一言だけだった。

担当医は父と会話をしたことがほとんどなかったため、耳が遠いことすら認識していなかったのである。

幸い、転院先での治療がうまくいき、父は小康を得て自宅に戻ってきたが、あくまでも完治はしていない。もし再発となったときには再入院すべきなのか、それとも自宅で療養すべきなのか。仮に在宅療養を選択し

た場合、老いた母ひとりどころまで看病ができるのか。そして、最期の看取りはどこですべきなのか……。不安の種は尽きない状況にある。

村松静子という看護師がいる。

09年にエイボン女性大賞を受賞。11年には赤十字国際委員会からナイチンゲール記章を授与され、日本赤十字社の名誉総裁である美智子皇后からナイチンゲール像が刻印された記章を手交されている。

村松のいったい何がこうした顕彰の対象になったのかといえば、「開業ナース」として在宅看護の世界を開拓した業績に対してである。村松は、看護師も開業医と同じように病院か



むらまつ せいこ／1947年秋田県生まれ。日本赤十字中央女子短期大学卒業。80年、日本赤十字社医療センターICU看護師長に就任。86年に在宅看護研究センター設立。92年に筑波大学大学院修士課程を修了し、日本在宅看護システム株式会社を設立。2001年、看護実践を退き、後進の指導を活動の中心にする。現在は、在宅看護研究センターLLP代表などを務め、看護関連のコンサルティング、教育事業に精力的に取り組む。著書に『自分の家で死にたい』など

ら独立して開業できること、看護師は決して医師の「靴持ち」ではないことを、身をもって証明してきた。

私たちが家族が直面している事態は、村松が取り組んできた在宅看護という問題に、そして医療者と患者のコミュニケーションを媒介するメッセンジャーとしての看護師というテーマに深く関係している。

日本人の誰もが直面しうる身近で

切実なこれらの問題に村松が半生をかけて取り組んできた背景には、あの痛恨の記憶が潜んでいた。

● 会話の練習をする

「しずか子ちゃん」

村松は1947年、秋田県に生まれている。祖父は現在の秋田県仙北郡の一角を占めた某村の初代村長、父は名門・秋田大学附属中学校の教

師、母も教師という家に育った。幼い頃は、いつも母親の陰に隠れている内気な性格だったが、村松には一風変わったところがあった。

「教職員の家族寮で暮らしていたのですが、近くの池に蛙の卵がたくさんあった。それを敷地内の女子寮の洗濯場を持ってきて、成長するのを観察したりしていましたね」

高校は秋田県立秋田北高校に進学

し、生物クラブの部長として活躍。食用蛙の心臓が生理食塩水の中で何時間動くかといった実験や、メダカの遺伝の研究に熱中した。高校では「メダカの静子ちゃん」と呼ばれたが、そもそのあだ名は「しずか子ちゃん」。生き物を観察することが好きだったが、人前で話すのが極端に苦手な少女だった。

「東京で理科系の大学に進学して、

生物が化学か、あるいは薬理学を勉強したかったのですが、2つ上の兄が大学浪人してしまったんです」

4年制大学への進学を断念した村松は、秋田の日赤短大を出た叔母の勧めで、東京の広尾にある日本赤十字中央女子短期大学に進学する。しかし看護の勉強は、どこか自分のやりたいこととはずれがあった。

「講義とは関係なしに数字の問題を解いたりしていたので、成績は悪かったですね(笑)」

68年に日赤短大を卒業した村松は、新卒で広尾の日赤中央病院(現、日赤医療センター)に就職。一時、新設された秋田県立脳血管研究センターの立ち上げに携わったが、再び広尾の日赤に戻って、今度は集中治療室(ICU)の立ち上げにかかわることになった。短大時代は患者のいる病室になかなか入れないほどの口下手だったが、カセットレコーダーを白衣のポケットに忍ばせて患者とのやり取りを録音し、密かに聞き直しては会話の方法を特訓した。

この時代の村松をよく知る人物に、現在、日本赤十字看護大学看護学部



日赤医療センターのICUに勤務していた時代の1コマ。右から村松、守田さん、仲野佳世子さん。後に、仲野さんも在宅看護研究センターに入り、現在は教育部長を務める(写真提供©村松さん)

の学部長を務める守田美奈子がいる。76年、守田が新人ナースとして日赤医療センターの内科病棟に入ったときの直属の主任が村松だった。

「村松さんは、直系の赤十字ナースだと思いますね。日赤には伝統的に看護に熱い思いを持った人が多いのですが、村松さんに初めてお会いしたときの第一声が、『守田さん、内科は奥が深いのよ』でした」

「直系の赤十字ナース」とは、看護師は医師に従属するのではなく自立した存在でなければならぬという誇りと自負心に満ちたナースのことだと、守田は言う。

「当時は、慢性病の患者に病気に関する知識を伝える『患者教育』につ

いて、医師と看護師がわざわざカンファレンスの場を設けて熱い議論を戦わせたりしていました。今の病院はどこも管理的になってしまいました。あの頃の内科病棟は刺激的で、あもしろい病棟でした」

後に守田は内科病棟を離れるが、ICUの立ち上げ時に、33歳という若さでICU師長に抜擢された村松の下で再び働くことになる。

「ICUで仕事をしていると、重い後遺症を抱えてこれからの人生をどうやって生きていくのだろうという患者さんにたくさん出会います。でも当時は、そうした人の受け皿がどこにも存在しなかった(守田)

そしてこの時代の出来事が、村松の人生を在宅看護のほうへと大きく傾斜させていくこととなった。

● 赤十字ナースとしてのプライド

村松が在宅看護を始めることになった直接のきっかけは、日赤のICUで治療を受けたものの結果的に植

物状態になってしまった妻を自宅に引き取らざるをえなくなった、ある男性からの電話だった。村松が言う。「村松さん、助けてくれ。妻の状態が落ち着いたから救急病院ではなく一般の病院に移ってほしいと言われていたのだけれど、24時間の付き添いが必要だから月に50万〜60万円も費用がかかってしまう。妻を入院させられる病院が見つからない。どうしたらいいのかわからない。そうおっしゃるわけです」

男性は困り果てている。なんとかするしかない。当時は訪問看護の制度などなかったから、村松が中心となって看護師11人からなるボランティアチームをつくり、ローテーションを組んで在宅看護を敢行した。

「夜勤明けに3時間寝てから1時間訪問するなんていう、ハードな生活を続けました。なぜか村松さんの周囲のナースは、みんな看護に熱中してしまっんですよ(笑)」(守田)

やがて、このチームの存在を知った医師から「自分の患者も引き受けてほしい」という依頼が入るようになり、ボランティア活動は3年間に

わたって継続されることになったが、病院勤務との両立には限界がある。そこで村松、守田、松沼瑠美子の3人が日赤から独立して、「在宅看護研究センター」を設立することになった。86年のことである。

この在宅看護研究センターこそわが国の訪問看護の先駆けなのだが、当時はメンバーに医師がいないと医療法人を名乗ることができなかったため、村松らは仕方なく有限会社という形態をとった。そのことが思わぬ反応を招くことになる。医療ジャーナリストの大熊由紀子が言う。

「看護師の世界は、奉仕の精神が重要だと言われるんですね。だから村松さんたちが開業したとき、ナースが金儲けをするのかと、ずいぶん批判を浴びたわけです」

対談を通して知り合った作家の遠藤周作やセコムの飯田亮会長(当時)が、世間の批判にもかかわらず支援してくれたこともあって、以降の村松は在宅看護の道をまっしぐらに歩むことになるのだが、実を言うと日赤をやめる直前、医師になろうかと考えたことがあったという。

ルポルタージュ 時代を創る女たち



村松を支援し続けた、作家の遠藤周作さん。周囲からの逆風の中、陰になり日向になり励ましとアイデアをくれた。遠藤さんの命日に、村松は今も墓参りをする(写真提供◎村松さん)

「ICUでは救急蘇生や処置のやり方を、看護師が若い医師たちに教えていました。ある意味でそこは看護師が自由に動ける場だった。ところが一步病院の外に出ると医師の指示がない限り、痰の吸引ひとつできない。すべて医師の指示で動かなくてはならないのです。だったらいっそのこと医師になってしまえばいいかなと思った」

しかし、結局村松はそうはしなかった。訪問看護のボランティアを通して看護師という立場の不自由さを痛感する一方で、看護という仕事の広がりや深さに魅了されていたのである。村松は看護をさらに掘り下げようと、医師免許ではなく臨床心理

士の資格をとることを決意した。患者の心をより深く知るためだ。

現在、訪問看護ステーションは全国に約7000カ所を数えるが、治療や処置を行う場合は必ず医師に「指示書」を書いてもらう必要がある。しかし村松は、在宅看護研究センターを立ち上げた当初、「指示書」と「依頼書」の2通りを作成していた。保健師助産師看護師法の第5条で、看護師は「療養上の世話又は診療の補助を行う」と規定され、第37条では、看護師は主治の医師の指示なく衛生上危害の生じる行為をしてはいけないと規定している。しかしその一方で、「臨時応急の手当て」をする場合には「この限りではない」とする。

村松はこの第37条の文言を拡大解釈して、看護師の判断でできることに限っては医師に「依頼書」を書いてもらうことにした。医師に指示されず訪問するのではなく、医師から「頼まれて」行くのだというのにこだわったのだ。赤十字ナース村松のプライドであり、意地でもあった。

● 自宅で家族に囲まれ 最期を迎えたい

大熊によると、村松らが立ち上げた在宅看護研究センターは、当時の厚生省が訪問看護ステーションの制度を作る際のモデルにされたそうだが、その痕跡が訪問看護ステーションの人員配置基準に残っているというからおもしろい。大熊が言う。

「厚生省特有の『風鈴』という言葉があります。厚生省には国民に負担増を求める法案を提出するとき、国民が喜ぶ政策と抱き合わせにするのが通例で、そのことを『風鈴をつける』と表現するのです」

当時、厚生省は老人保険制度の一部負担額を増額する法案の提出を検討していたが、その「風鈴」として白羽の矢が立ったのが、訪問看護を充実させる制度だった。

「医師会は昔から『看護師に患者を取られてしまう』という理由で訪問看護に猛反対していました。けれど、誰だって病院で死ぬより住み慣れた自宅で、家族や見慣れた家具に囲まれて最期を迎えたいでしょう。だから

時代を創る女たち

ら国民にとってはいい制度なんです」(大熊)

厚生省は村松らの在宅看護研究センターをモデルに訪問看護ステーションの仕組みを作り上げたが、最低人員を25人として、それを下回る場合は認可しないと規定した。

「なぜ25人かといえば、村松さんは守田さんと松沼さんの3人体制で始めたわけだけれど、松沼さんが出産直後だったので半日しか働けず、実質25人だったからなのです」(大熊)

つまり合理的な根拠のある数字ではなく、たまたま在宅看護研究センターの陣容が25人だったから、ということであるらしい。

「実はエイボン賞で村松さんを推したのは私なのですが、村松さんはプロの技を持った看護師であると同時に非常に先覚的な方です。他国では歯科衛生士も理学療法士も開業しているし、日本でも薬剤師は開業できる。なのに、看護師に開業権がないのはおかしいという議論はずっと昔からありました。村松さんは日本で初めて、開業ナースを事業としてきちんと成り立つ形で始めた人なので

す」(大熊)

では、在宅看護とは実際にはどのようなものなのだろうか。

入院していた病院の紹介で、たまたま村松率いる日本在宅看護システムのサービスマスターになった患者のひとりに、タレント永六輔の妻、昌子がいる。01年の初夏、昌子が末期の胃がんであると告知を受けた永一家は、同年11月から昌子が亡くなる02年の1月まで、約2カ月間にわたって在宅看護を行っている。永の二女、麻理が言う。

「母が初めて入院した時点でいきなり余命2、3カ月と宣告されてしまいました。病院は、あくまでも病気を治して帰すところ。だから病院にいくと、『私たち家族はそのレールに乗っていないんだ、所詮負け戦なんだ』という被害者意識を持ってしまっています。母が病院嫌いだっこともありますが、それが在宅看護を選んだ大きな理由です」

もちろん病院の医師も看護師もやるべきことはやってくれたが、麻理の目には言動のすべてが素っ気なく見えてしまう。しかし、「開業ナース」の面々はまるで違った。

「きつと治りますよといった気休めは決しておっしゃらないのですが、負け戦にしっかりと寄り添ってくださる。それが、一番心に響きました。この人たちは100%患者の側に立ってくれる人たち、本当に私たちの味方なんだと思えました」

昌子の様子も病院にいたときとはうって変わって明るくなり、食欲も出た。「最後に救急車は絶対なしだからね」を合言葉に、永の家族と訪問看護師たちは、時には一緒にテレビを見て笑い、時にはクラシック音楽を聴き、時には孫の話に興じながら最期の日々を過ごした。

昌子はお気に入りのソファの上で息を引き取ったが、麻理は昌子の足元で主治医と看護師が静かに頭を垂れている姿を鮮明に記憶している。

「病院だったら心電図がピーと鳴っておしまいなのでしょうが、看護師さんのお力を借りて自宅で母を看取ったことで、『人は死ぬ』ということを自然に受け止められた。それ以来私は、死が怖くなくなりました」

訪問看護師は看護だけでなく、看

取りのプロでもあったのだ。だが、プロだからといって人の死に心を動かされないわけではなかった。

「母が亡くなった1週間後に担当の看護師さんがお線香をあげに来てくださったのですが、お線香を手向けるときに初めて泣いてくださったのです。プロ意識だけでなく、人として温かい心を持っておられることに感激しました」

●心ある人がいたから
乗り越えられた

すでに30年以上にわたって在宅看護を実践してきた村松が、「人生最後の仕事」と位置付けるのが、「メッセンジャーナース」の育成である。自らメッセンジャーナースの認定協会を設立し、育成のためのセミナーを開催。認定を受けた全国のメッセンジャーナースを繋ぐネットワークの構築に、村松は今全精力を注ぎ込んでいる。

大熊は、「メッセンジャー」と聞くと、どうしても医師の使い走りという印象を持ってしまう」と言うが、筆者も同感だ。村松はなぜメッセンジャー

「という言葉をを使うのだろう。」
「メッセンジャーナースは、私がたどり着いた看護のエキスなんです。看護の究極は、患者本人が自分でやろうとすること、たとえわずかでもいいから支援すること。もしも患者さんの意識がなかったら、その方がお元気だったときのアルバムを見

せてもらってでも対話をして、患者さんの声を一所懸命に聴く。そうすると、どんな処置を望んでおられるかがわかってくるのです」
村松は、日赤のICUで生涯忘れられない痛恨事を経験していた。80年、33歳という若さで新設されたICU師長となった村松のもとに、ランニング中に

急性心停止で倒れた18歳の青年が運ばれてきた。救急部が心拍の蘇生に成功したものの、意識は戻らない。

夕方、東北地方から青年の家族がかけつけた。小学校の校長だという父親はまったく取り乱した様子を見せず、スタッフが違和感を持つほどの冷静さで状況の説明を受けてい

た。

2日後、息子の脳死宣告を受けた両親から、眼球、角膜、腎臓を提供したいとの申し出があり、村松が中心となって家族の心情を聴いた。「息子は人のためになることをしたいと言っていたから、なんとかして世の中で生かしてやりたい」と父親は言った。そして、「決して感謝されたくて臓器提供をするわけではないから、提供を受けた人の名前は知りたくない。息子のことも私たち家族のことも伏せてほしい」と付け加えた。

村松は家族の意向を日赤のスタッフだけでなく、臓器の受け入れ先にも明確に伝えたつもりだった。だが、あるうことが青年の葬儀の当日、受け入れ先からの感謝状が遺族のもとへ届いてしまったのである。「私は、お父さんが臓器提供を申し出られた場面を今でも忘れることができませぬ。あのときのご両親の心情はどれほど凄まじいものだったかと思うのです。それをいつたい誰が受け止めるべきなのか。臓器の提供を受ければ、医療者は確かに助かる

かもしれません。でも、提供する側の気持ちを少しでも察したら、感謝状って話じゃないんですよ」
村松の語気が強くなった。

村松はメッセンジャーナースを、「患者が自分らしく輝いて生き抜くための支援をする存在」と定義する。そのためには単に看護技術が優れているだけでなく、患者本人や家族が発信する不安やつらさ、そしてかき生きたいというメッセージを的確に、そしてがっちり抱きとめることのできる「心」が不可欠なのだ。しかしそれは現代の医療現場に最も不足しているものなのだ、村松は嘆く。だからこそ、メッセンジャーナースを育成している。

青年の父親と、電話で話した。「感謝状のことは、もうなんとも思っていないです。あんときは、自分がオロオロしてらんねがったから、つらかったんだ。でも村松さんが心のある人だったから、なんとか乗り越えることができました」

電話口から聞こえてくる朴訥な東北弁は、意外な明るさに満ちていた。

やまだ せいぎ 1963年生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業後、鉄鋼メーカー、出版社勤務を経て独立。人物ルポを多数執筆。著書に『東京タクシードライバー』など